

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	雑誌『女聲』という場：中国共産党地下党员・丁景唐の活動を中心に
Author(s)	張, 備
Citation	国文学攷, 247 : 17 - 30
Issue Date	2020-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051475">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051475</a>
Right	Copyright (c) 2020 by Author
Relation	



## 雑誌『女聲』という場

—— 中国共産党地下黨員・丁景唐の活動を中心に ——

はじめに

一九三七年八月の第二次上海事変後、上海市民は戦火を逃れて上海の租界（外国人居留地）に避難していた。それから一九四一年十二月に太平洋戦争が勃発するまでの期間は、中国では「孤島期」と呼ばれている。この四年間の「孤島期」に、急に大量の資金と労働力が上海租界に集まり、戦争で破壊された上海の工業、商業と文化事業はまたたくまに復興し、一時は衰退していた出版業も再び活況を呈するようになった。しかし、その活況は長く続かなかった。太平洋戦争開始後、公共租界は日本軍に接収され、上海全体は日本軍の占領下に置かれた。厳しい言論統制の下で、それまで出版された雑誌はほとんどが廃刊となり、上海の文壇は一九四三年まで静かな闇に包まれた。<sup>1)</sup>この時期、対支文化宣伝事業のために、日本軍部と汪精衛南京国民政府（以下「南京政府」）はプロパガンダ雑誌の

## 張 備

創刊を図っていた。

一九四二年の春、田村俊子は南京政府の宣伝部顧問を務める草野心平を訪ね、日本総領事館囑託の身分と南京政府からの補助を得、同年五月に雑誌『女聲』を創刊した。第一巻第三期以降奥付に「工部局警務処登記証」と「国民政府宣伝部登記証」（第三巻第二期以降）の記載があることから、南京政府から補助を得ていたことがわかる。つまり、雑誌『女聲』は日本軍部と南京政府に迎合するプロパガンダ雑誌だったはずである。しかしながら、先行研究が指摘しているように、『女聲』は軍部と政府に追従する雑誌としての性格が少なく、青年新人作家の作品が多く採用され、一定の文芸性が見られるのである。『女聲』の第二巻第十二期の「先聲」（巻頭言にあたる）に記述されているように、『女聲』が創刊された時には雑誌も作家も足りず、「砂漠」という言葉で上海の文壇を形容した人さ

えいた、「当時女聲は砂漠の花だった」。このような『女聲』の性格を考える際、一つの重要な要素として、中国共産党地下黨員（秘密黨員）の参入は無視できない。

雑誌『女聲』の編集長である俊子は日本人であるが、『女聲』は華字婦人雑誌のため、編集長以外の編集者は全員中国人である。そして投稿者もほぼ中国人である。すでに知られている事実だが、中国人共同編集者の一人である関露は、日本の情報収集をおこなったり日本共産党に連絡をとったりする目的で派遣された中国共産党の地下黨員である。また、丁景唐をはじめとする『女聲』に寄稿した多くの作者たちも同じく地下黨員である。

これまでの『女聲』の研究者たちはおおよそ三つの方向から『女聲』を研究してきた。まず『女聲』の全体的状況を紹介する研究者として、渡辺澄子や塗暁華<sup>3</sup>があげられる。彼女たちの研究によって、『女聲』の創刊経緯、内容構成、編集と執筆者の状況などが明らかになった。そして、『女聲』の基本情報が明らかにされ、研究者たちは編集者（俊子と関露）と『女聲』の関係に視線を移していく。例えば、劉建輝は、『女聲』の成功は「単に俊子らの執念と努力だけ」<sup>4</sup>ではなく、いろいろな外部の条件も要因であると指摘している。山崎真紀子は「女性同士が励ましあっておのれ一人を愛することを可能にする媒体、それが俊子にとっての『女声』だった」と、『女聲』と俊子の関係について説明している。また、関露と俊子の関係を論

じる呉佩珍の論文では、「俊子と関露は〈女性解放〉、〈反戦〉、〈反帝国主義〉という普遍性を認識」<sup>6</sup>していると、述べている。近年、『女聲』の内容を見る論文が現れた。『女聲』の読者投稿欄に当たると、『信箱』を紹介する山崎真紀子の論文、『女聲』における女性観を見る段毅琳<sup>8</sup>の論文、そして『女聲』における宮沢賢治の作品を考察する頼怡真<sup>9</sup>の論文がそれに該当する。このように、『女聲』の執筆者と『女聲』の内容に関する研究はまだ少ないのである。特に中国人作家とその作品についての研究はほとんどない。

一方、丁景唐をはじめとする共産党地下黨員たちに言及している研究において、彼らの『女聲』での活躍は関露の介入と結びつけて論じられる傾向にある。例えば、劉建輝は「関露は従来の人脈とその影響力を使って、巧みにその作家たち、とりわけ一部の左翼系執筆者を『女聲』に引っ張り込み、彼らと連携して田村の雑誌刊行を支えていたのである」と指摘している。丁景唐本人も晩年の回想で、「彼女（関露、稿者注）が投稿を選ぶ時には、確かに見る目があった。そのため、たくさんの青年共産党員の投稿が『女聲』に発表された」と述べ、関露が投稿の選別に介入したと思っているようである。<sup>11</sup>塗暁華は丁景唐本人をインタビューし、丁景唐をはじめとする地下黨員の基本情報と『女聲』への投稿経緯を明らかにし、丁景唐の文章をいくつかを紹介した。しかし、丁景唐の作品への分析はまだ足りず、ただ「関露、丁景唐などの進歩的な作品は『女聲』の誌面

を多く占め、『女聲』を当時上海に生きる地下黨員たちの自由言論の園地にした」と、地下党側の働きを評価することとなり、俊子の介入や俊子と丁景唐の關係は看過されている。

果たして、『女聲』において、共產党地下黨員たちの活動はどのような意味を持っているのか。『女聲』に対する評価と『女聲』の性格は、彼らの投稿によってどのように変わるのか。それらの問題は簡単に結論付けられないが、本稿では、『女聲』投稿者の丁景唐を分析対象として、先の二つの問題について考える。具体的には、主に彼が『女聲』に発表した文章と論説を分析し、俊子との關係に触れながら、地下共産黨員たちの『女聲』における活動を明らかにし、『女聲』の性格を考え直す。

#### 一 『女聲』の作者たち

中国側の研究では、日本占領下の上海で刊行されていた文芸雑誌を日本または南京政府からの援助を受けたか否かによって、二種類に分けている。『女聲』は明らかに前者である。日本または南京政府の援助を受けていた文芸雑誌であれば、だいたい親日派の文人のものが誌面の大半を飾っているはずである。ところが、『女聲』は次のような四つの執筆グループで構成されている。<sup>12)</sup>

まずは一般投稿者である。このグループの執筆者たちは明確な政治的立場がない（または分からない）。さらに、このグループの執

筆者たちは編集者との交友關係があったか否かによって、二つの群に分けられる。例えば、閑露の知り合いで『雑誌』編集者の魯風、俊子の友達の陶晶孫などの既に有名な作家『雑誌』『風雨談』『万象』などの雑誌で活躍していた作家が多い）、専門家たちの寄稿は、おそらく編集者の依頼を受けて書いたものだろう。

加えて、単純に原稿料または趣味のために寄稿した人（梅林、堯洛川など）もいる。これらの執筆者は新人作家、学生、青年記者などによって構成されている。当時、『女聲』の原稿料は他の雑誌より高く、しかも新人青年作家を発掘するために懸賞小説を三回開催したため、他の雑誌よりも多くの新人作家が集った。

次は親日派の文人のグループである。このグループは、日本軍部または南京政府の文化宣伝事業に参与したり、「大東亜政策」を宣揚したりするために雑誌で活躍していた中国人作家たちの集まりである。周作人、柳雨生、張寶平、路易士、荻崖などがあげられる。周作人が「女性と読書」<sup>13)</sup>「女子と読書」<sup>14)</sup>（第二卷第十期）で、「投稿してほしいという佐藤女史からの手紙を受け取った」と自分で証言したように、このグループの執筆者たちの投稿は俊子が依頼した特別寄稿だと考えられる。彼らの投稿は他のグループと比べて、数が少ない。

三つ目は日本人作者のグループである。雑誌『女聲』は日本軍部の援助で作られた雑誌で、その編集長も日本人である以上、日本人

投稿者の出現も当然のことである。『女聲』で登場した日本人投稿者は村尾絢子や小宮義孝が挙げられる。村尾絢子は若い画家で、俊子の晩年の友達である。阿部知二の「花影」<sup>15</sup>というエッセーによると、村尾は俊子の上海時代における「心の避難所」であった。彼女は文章の寄稿はなく、もっぱら『女聲』の挿絵を担当した。もう一人の小宮義孝は寄生虫学者であり、彼が投稿したのは農作物などについての知識を紹介する「稻と螟虫」（『稻和螟虫』第二巻第七期）という小品一篇である。村尾と小宮以外に、宮沢賢治、火野葦平、豊島与志雄などの日本人作家も『女聲』に書いているが、本人からの投稿ではなく、彼らの作品の訳文を載せているだけである。故に彼らは『女聲』の投稿者とは呼べない。

そして最後は共産党地下黨員である。中国共産党の地下党はもともと一九二七年四・一二事件後、国民党の特務機構に対抗するため生まれた組織だが、日中戦争勃発後、「抗日反蔣」（蔣）は蒋介石を指す）が最も主要な闘争目標になり、国民党と闘争しながら抗日運動を展開していた。一九三三年から一九三五年まで、上海の共産党地下党が国民党によって肅清されたため、しばらくほぼ全滅の状態になっていた。一九三七年に、共産党中央委員会の指示で、劉暁は上海で地下党の再建を図った。一九四一年十二月、上海が日本軍に全面占領された時、上海の共産党地下党の人数は二千人余りであったと言われる。残った上海地下党は主に日本軍の情報を収集し、

黨員を拡大し、広範な統一戦線を結成して、出来る範囲内で抗日思想を宣伝しようとしていた。<sup>16</sup>当時上海に残っていた文芸雑誌では、「大東亜政策」を積極的に宣伝するものであれ、すでに固定的な作者グループを持っていたものであれ、共産党地下黨員たちにとって投稿しにくい。一方、雑誌『女聲』は婦人雑誌だとは言っても、文芸欄が充実していて、プロパガンダ臭が薄く、新人作者からの投稿も歓迎していたので、すぐに地下黨員たちの注目を集めた。実際に『女聲』は多くの地下黨員の作品を採用している。

投稿が最も多い丁景唐以外には、鐘恕（微萍）、楊志誠（陸洋、修帽、洋）、陳琳（羅紋、羅沈）、董業山（麦耶、史蕪華）、鮑士用（席琳、席明）、宇文洪亮、李冷路（冷路、陳嬪忱（凱勒）、陳新華（陳聯）、楊豊（揚子江、楊鋒）、唐敏之（胡生樞）などの地下黨員も『女聲』に投稿していた。

『女聲』における共産党地下黨員の投稿者の多くは、閃露の友人の楊豊以外、丁景唐の知り合いである。『女聲』に投稿していた頃の丁景唐はまだ上海光華大学中文系の大学生で、『女聲』に投稿する前に『小説月報』などの雑誌を編輯した経験がある。彼の戦友も二十代前後の青年が多く、職業は主に教員、学生、記者と職員である。投稿者では、女性の方が多いが、男性も少なくはない。丁景唐、董業山、鮑士用、宇文洪亮、李冷路、唐敏之は皆男性である。また、丁景唐自身が証言しているように、『女聲』へ投稿した地下黨員は

「共産党地下黨員の中で、比較的素質と修養があり、創作技能の高い」人である。なお、共産党地下黨員たちが『女聲』に投稿しはじめたのは、『女聲』の第一巻第六期（一九四二年十月）からである。彼らが投稿した作品で最初に発表されたのは、鐘恕が「微萍」という筆名を使って書いた短編小説「青色の恋」（「青色的恋」）である。

『女聲』において、共産党地下黨員（閑露を除く）の投稿は、百編ほど掲載されている。丁景唐の投稿は五十六編（その内の一編は唐敏之との共同創作）で、全員の投稿数の半分を超えている。丁景唐の投稿は詩と評論が一番多く、董楽山の投稿は全部劇評で、ほかの人の投稿はほぼ小説と随筆に集中している。その中、楊志誠が「陸洋」という筆名で書いた長編小説は、『女聲』の懸賞小説の一等に当選し、第一巻第十期から第二巻第一期まで連載された。

また、地下黨員たちが『女聲』に投稿しはじめてから、第一巻第七期と第四巻第一期以外には、毎月の『女聲』に彼らの作品が見られる。投稿の数からみれば、地下黨員たちの投稿は主に第二巻に集中している。『女聲』は創刊以後、特集以外の号の投稿はだいたい二十数編になっているが、第三巻からは十数編にまで減少する。その原因の一つとして、物価の高騰による用紙の不足が考えられる。<sup>⑮</sup>第三巻からの地下黨員たちの投稿の減少もそれによるものであろう。また、毎号の投稿の内訳は、およそ半分が編集者か編集者関係者（親日派文人、日本人作者）によるものであり、残りの投稿は半

分程度が地下黨員たちの投稿である。このように、『女聲』における地下黨員の投稿は不自然だと言えるほど多いことがわかる。

## 二 丁景唐と『女聲』

先にも述べた通り、地下黨員の中では『女聲』への投稿は丁景唐のものが最も多い。そして他の多くの地下黨員の投稿者は彼の戦友である。丁景唐が『女聲』に最初に投稿したのは第一巻第八期で、鐘恕の筆名「微萍」を借りて発表した「三男一女の物語」（「三男一女」という小説である）。

丁景唐の全体的な投稿状況について、塗曉華は次のように整理している。

彼（丁景唐、稿者注）は歌青春、戈慶春、秦月、辛夕照、楽未央、楽無恙、宗叔、包不平、微萍（同僚の筆名を借りた）などの筆名を使い、一九四二年十二月号第一巻第八期から『女聲』で文章を発表しはじめた。全部で合計五十六篇、その内詩歌が半分を占め、二十六篇がある。上述した九つの筆名には、執筆内容によっておおよその使い分けがある。歌青春は主に詩を書き、楽未央、楽無恙は學術論文を書く。丁景唐が『女聲』に発表した文章は基本的に二種類に分けることができる。一つは現代の詩歌、散文、雑文、小説であり、もう一つは古典文学、詩

歌と民歌を大量に参照して書いた文章で、主に圧迫されている中国女性のために訴え、封建主義と旧中国の暗さを非難することをテーマとし、『女聲』の数多くの評論の中で奥が深いものだと言えよう。<sup>19)</sup>

当時の上海では日本と南京政府による言論統制が厳しかったので、雑誌に投稿する時には、共産党地下黨員だけでなく、一般の投稿者の中にも違う筆名を使って投稿する人が多かった。丁景唐は『女聲』で九つもの筆名を使っていた。

前述のように、地下黨員の投稿は第三巻から減少する傾向が見られる。といっても、主に丁景唐の投稿が減少したのである。第三巻第一期で発表された「目の疾患記」（「目疾記」という丁景唐の病気の体験記には、「この数ヶ月、目の病気に邪魔され、長い間文章を書いてなかった」と記述されている。つまり、丁景唐の投稿の減少は、前節に述べた紙価の暴騰以外に、彼自身の健康問題もその原因の一つだと考えられる。

俊子の片腕の関露は、俊子以外の編集者の中では一番深く『女聲』の編集に参入した人である。彼女は共産党地下黨員で、秘密の任務を受けて女聲社に入社した。それゆえ、彼女が意識的に地下黨員たちの投稿を取り入れたと考える向きもあるかもしれない。しかし、当時の関露と丁景唐は、お互いの地下黨員という立場について、全

く知らなかった。<sup>20)</sup> ゆえに、前述したように、丁景唐は関露が投稿者の背景を察したため、わざと地下黨員たちの投稿を多く採用したと思っているようである。

しかし、先行研究によると、『女聲』の総責任者は俊子であり、中国語の原稿でさえ彼女が最後に見てから掲載を決めていたのだという。確かに、女聲社が太平洋出版社から独立した後、物価も高騰する中で、俊子は資金集めと資材の調達のために東奔西走せねばならず、後期の『女聲』の編集は関露に任せたとろが多い。だが、丁景唐たちの原稿掲載はもっと早い段階から行われており、関露が投稿者の身分を察していたのかは疑わしい。

関露は『女聲』の編集者として、主に評論欄と劇評欄を担当していた。彼女の書いた評論には、性の自立と解放を呼びかけたり、旧来の女性解放の問題や女性を抑圧する社会制度を指摘したりする「女性解放論」が多い。例えば、創刊号に関露が投稿した「若い女性達の欠点」（「青年婦女的缺點」）では、現代の青年女性には「一、虚栄心がある二、人に頼る考えがある三、平等と自由を曲解している」という三つの欠点があると指摘されている。そして、女性は真の解放が欲しいなら、まずは刻苦勉励し、自分の知識、能力と技術を高めるべきであると述べられている。女性の連帯関係を強調し、女性の就職と経済的な自立に関心を示す関露の姿勢は、俊子の思想と共通している。とは言え、「東亜を導くものが日本であるならば、

東亜の婦人を導くものは日本の婦人でなければならぬ」と主張し、中国の労働階級の女性より知識階級の女性に関心を示す俊子は、地下黨員たちの協力者にはなりえなかったことも注意すべきであろう。

『女聲』の創刊号では、「(一) 女性の声、(二) 女性のための声、(三) 女性からの声」と明記されている。そして、第二卷第十一期の「余聲」(編集後記)には、「読者から「文芸欄を充実してほしい」という手紙が来た。本雑誌の編集者たちも小説と詩などを出来るだけ多く掲載したい。特に青年作者の作品を多く取り入れたい」と、青年作者を歓迎する姿勢が示されている。前述のように、『女聲』へ投稿した地下黨員は比較的素質と修養がある人であるため、『女聲』に相応しい投稿者だと考える。さらに、当時の上海において、多くの既成の作家は内陸の都市へ逃げ、上海の知識層の婦人も少なくなっていたため、『女聲』の投稿基準に満たず投稿は少なかったと言えよう。第三卷第二期の「先聲」にも懸賞徴文ではなかなかいい投稿がないという内容の記述がある。以上のことから、丁景唐や他の進歩的思想を持っている地下黨員たちの投稿が『女聲』にたくさん採用されたのはごく自然なことだと考えられる。

「目の疾患記」で、丁景唐は俊子の印象について「左俊芝(俊子の中国語の名前、稿者注)と会うたびに、彼女はいつも熱意を持って、私に執筆の依頼をしていた」、「自分も訥弁で、第三者の言葉(お

そらく英語のことを指す、俊子は英語が喋れる。稿者注)で答えられないのは遺憾だが、その温かい心遣いが伝わってくる」と、触れている。丁景唐の娘である丁言昭の証言により、閔露の友達で共產党地下黨員だった楊豊も、俊子に原稿を頼まれたことがあるという。<sup>22)</sup>つまり、俊子は自分から丁景唐や楊豊に寄稿を依頼していた。そのため、閔露一人が独断で丁景唐たちの投稿を選んだとは考えにくい。

### 三 『女聲』における丁景唐の作品

『女聲』で発表された丁景唐の作品は全部で五十六編ある。詩歌が一番多く二十六編で、その次に多いのは評論と隨筆(小品文、隨想、感想などを含む)である。小説と翻譯作品は少なく、二つずつしかない。先に述べた通り、丁景唐は九つの筆名を使い分けている。最も頻繁に使われている筆名は歌青春、辛夕照、楽未央、楽無恙である。本節では、丁景唐の具体的な作品をいくつか取り上げ、ジャンルごとに分けて見ていく。

#### ① 小説

『女聲』で発表された丁景唐の小説は二つしかない。一つは第一卷第八期の「三男一女の物語」で、前節で触れたように、地下黨員の鐘恕の筆名(微萍)を借りて発表したものである。もう一つは丁景唐と唐敏之と共同で書いた「秀才ちゃん」(「阿秀」第三卷第四期)で、

丁景唐は「辛夕照」という筆名を使っている。

「三男一女の物語」は大学生活を描いた作品である。女子大生が三人の不良学生からかわれ、交際を求められる。女子大生は、三人を同時に同じ場所に呼び出し、数時間待たせて、恥をかかせるという物語である。この短編小説は、ユーモアのある表現で道楽学生の行為を諷刺することで、機転のきく女子大生のイメージを作り出している。また、勉学に集中し、向上心があるという作者の女子大生への期待も反映されている。当時の丁景唐も大学生であるため、この作品は彼の大学生活から素材を得ていたかもしれない。

一方、「秀ちゃん」では「走单帮」<sup>(2)</sup>の少女秀ちゃんの話が描かれる。実家に戻ろうとする「私」は、故郷と上海を往復して雑貨を販売する秀ちゃんと偶然船で出会う。秀ちゃんは自分の上海での商売と生活について「私」に語り、会話をするうちに「私」と秀ちゃんは遠縁の親戚だという事実が発覚する。「私」は若い義理人情が深く、一人で頑張り続ける秀ちゃんに好感を持ち始める。しかし、実家に戻った後、母親から秀ちゃんとの縁談があることを聞かされて、「私」はそれを自由恋愛ではない結婚だと思って断った。その後、秀ちゃんは上海に戻り、埠頭のギャングに騙され、危うく売られてしまいうようになる。

当時の上海の社会情勢は不安定で、秀ちゃんのような少女はたくさんいた。この小説は、女性が自立しようとする時に直面する男女

不平等の問題を暴き出している。困難を乗り越えて生き延びようとする女性を取り巻く理不尽さに深く同情する作者の気持ちが感じ取れる。

丁景唐の小説に登場する女性は、一人は知識層の新しい女性で、一人はまだ生活するためにもがいている女性である。これら二つの小説はどちらも当時の社会における女性の現実と問題を反映した作品だと言える。しかし、抗日と社会主義思想のある作品だと言いたい。

## ② 評論、随筆

丁景唐の評論は、陸放翁から『詩経』、『論語』、『二十四孝』など、たくさん古典文学、詩歌、民歌を題材にしている。

「詩経の民謡における女性の生活と恋愛、結婚」(『詩経民歌中反映的婦女生活・恋愛・結婚』第一卷第十一期)では、『詩経』の中の具体的な詩歌を取り上げ、それを分析しながら今の女性の生活状況と比べている。例えば、中国の最初の女性詩人の許穆夫人(許穆公の妻)は、自分の母国が北狄に襲われたと聞き、母国を救うべくすぐに一人で国へ戻る。丁景唐はこれについて、昔の女性はだいたい「爽やかで、活力に溢れている」と称賛している。女性の恋愛については、「詩経国風・召南篇」の「標有梅」などの詩をあげながら論じている。「標ちて梅有り、其の実七つ、我を求むるの庶士、其の吉に迫ふべし」という詩には、枝に残っている梅の実から自分

を嫁に迎えてくれる人が現れない状況を連想して焦る乙女の気持ち  
が描かれている。これに対して、丁景唐は「もし当時の女子が社会  
生産に参入し、独立した人格を持ってなければ、『詩経』の中の自  
由恋愛を求める女子はそれほど多く描かれなかったはずである」と  
述べ、女性が自立して労働参加することを認めている。この考えは、  
女性の経済独立と自立を不断に読者に呼びかけている『女聲』の主  
張とも合致している。

また、丁景唐は昔の女性の結婚が、今の女性よりはるかに不自由  
であったことも指摘している。「陸放翁の離縁話」(上・下)、「陸放  
翁出妻事蹟考」(上・下)第二卷第四、六期)と「妻との離縁話」(上・  
下)、「出妻史話」(上・下)第二卷第八、九期)は、陸放翁、孔子、  
孟子が妻を離縁する話をもとに、今の結婚制度と法律を反省した文  
章である。『礼記』には、孔子に家から追い出された妻が亡くなっ  
た時に、息子である伯魚が慟哭すると、孔子が「母の死に悲しみず  
ぎだ」と叱責したという記録がある。孔子の理屈では、離縁された  
妻は自分の妻ではなくなるので、息子の母でもないはずだというこ  
とである。古代では「三不去七出」という、離婚すべき七つの原因  
と離婚を制限できる三つの条件を表した教えがある。丁景唐は、「三  
不去七出」の本質について、「七出」の原因は七つ挙げられているが、  
適当に理由を作りこの七つの原因に当てはめて、妻を捨てることは  
簡単であるし、「三不去」があるとと言っても、実際には女子は自分

から離婚を要求する権利がなく、ただ「聖人」たちが自分の自己中  
心の離縁を美化するものでしかないと、分析している。

丁景唐は『詩経』、『礼記』などの文献のほかには、朱淑真、秋瑾  
など旧中国の有名な女性についても『女聲』で紹介している。「詩  
人秋瑾」(第三卷第六期)において、丁景唐は秋瑾の詩を取り上げ、  
彼女の詩における二つのテーマ、「民族思想」と「女性解放」を詳  
しく分析している。例えば、「宝刀歌」の中にある、「幾番か首を回  
らして京華を望めば、亡国の悲歌涙涕多し。北上せる聯軍八国の  
衆に、我が江山を又も贈送す」「上より我が祖黄帝赫赫の成名を受  
け継ぎ、一洗ぎす数千百年国史の奇羞を」というような句は、数  
千万の国民を救おうとする漢民族たちの願望を描出している。秋瑾  
の詩歌は、男性だけではなく、女性も勇壮豪放な詩歌を作って、国  
のために力を尽くすことができるということを証明している。文章  
の最後に、丁景唐は「秋瑾が殉難してから四年後、『辛亥』が来た。  
秋瑾は先覚者の喇叭を吹き、その音は空高く響きわたって、深く眠  
る世界に西風のように火をつけた」と、秋瑾を漢民族の英雄として  
高く評価している。丁景唐は戦後に、「私たちは身を殺して仁をな  
した秋瑾に仮託して、国の解放のために献身する革命精神、一日も  
早く暗い統治を倒すために戦い続けることを賛美する。夜明けの光  
が早く大地を照らすことを祈る」と、「詩人秋瑾」を書いたときの  
気持ちを吐露している。<sup>2)</sup>

当時の上海文壇では、厳しい検閲を避けるために、作家たちは古典の話を使って現代を諷刺したり、政治の話を避けて恋愛話や都市の退廃的風俗を描いたりしていた。丁景唐の評論も、古典について説明しながら、封建制度と男女不平等といった旧思想を批判している。第二卷第七期の『女聲』の「先聲」には、「葉未央は中国の古典文学詩歌を幅広く読んでいる作者である。しかし、彼は決してただの「秀才」ではない。彼は現代人の頭で古代の書籍を読むことができる」という記述がある。つまり、『女聲』の編集者は丁景唐の創作方向を認めていた。ただし注意すべき点は、はじめの頃の『女聲』において、丁景唐の評論は女性解放の問題に集中しているが、次第に「詩人秋瑾」のように女性の問題を民族の解放と繋いで言っているという点である。

一方、丁景唐の評論以外の随筆などは、主に彼の生活と創作につながる内容で、女性解放との関連性は評論より薄い。例えば、「之江学校の思い出」（寒窗瑣語憶之江「第一卷第十期」）は丁景唐が母校の之江大学に寄せた随筆で、之江大学の明るくて自由な校風が詳しく述べられている。「子供達との生活」（「生活在孩子群間」第二卷第四期）においては、丁景唐が病気の友人の代わりに学校で数ヶ月間授業を教えた経験が語られる。もともと子供が苦手だった彼は数ヶ月の間に、子供たちとすっかり仲良くなり、最後に離れるときに非常に悲しくなってしまう。子供たちの天真爛漫と貧しい生活環

境などを描いた、人を感動させる小品文だと言える。他に、作者自身の日常と感想を語るものとして、「信箱」の読者への答えとして書いた自分の創作経験談である「自省」（「我的自省」第二卷第八期）、病気になった時の思考を述べる「目の疾患記」などが挙げられる。

### ③ 詩歌

丁景唐の全ての投稿の中では、詩歌が一番多い。彼の詩歌は『女聲』に発表された詩歌の大半を占めている。詩は内容によって、およそ五つのテーマに分けることができる。

まずは、国や国民を憂い、現実を反映するものである。丁景唐の詩は彼の評論、小説などに比べ、現実批判と諷刺の表現がより鮮明にみえる。代表的なのは「捨てられた赤ちゃん」（「棄嬰」第一卷第十期）と「雁」（第二卷第六期）である。「捨てられた赤ちゃん」は第三者の視点から、ある捨てられた赤ん坊の話を語っている。「小さい命が 湿っぽい隅でこわばって、壁のきわに生きる苦みたいに」、「あーあ、世界はこんなに大きいのに、きみに自由に呼吸させないなんて」と、捨てられた赤ん坊の遭遇に同情を寄せている。そして、「今の時期に、きみを育てるなんてできるわけがない、きみ、小さい命がどうやって、世間の悲惨、米屋の入り口での長い行列を理解するのか」というように、赤ん坊が捨てられる原因は不穏な社会情勢による貧困層の拡大にあるとほのめかしている。また、「雁」は、杜甫の「旧国霜前に白雁来たる」という詩句を素材にして書か

れている。その詩句「旧国霜前に白雁来たる」は「九日」という重陽の日に作った詩であり、杜甫はこの日に高い台に登り、家族と故郷を思い、兵乱と自分の老衰を嘆いた。「雁」では、「果てしなく広々とした空には雁の群れが飛んでいて、漠北から秋風を連れてきたが、北國からの便りは持ってこない」と、「九日」と同じような国を憂える感情が漂っており、読者に戦争中の中国の現状を思わせる。

二つ目のテーマは、青春の息吹と未来への希望を感じさせる詩である。一九四五年三月に、丁景唐は初めての詩集『星の夢』（『星底夢』）を自費出版した。『女聲』の第四卷第二期にはその詩集の広告と閑露が書いた書評が載せられている。閑露は丁景唐の詩について、次のように評価している。

「藍色の海」、「風と小さな草」、「桃色の雲」、「陽光」といういくつかの詩は、命のリズムで暖かさとの美の感覚を私たちに与えた。しかしこれは「星の夢」の最も素晴らしい点というわけではない。「星の夢」という詩集において、私たちの興味と情熱をもつと呼び起こさせるのは、作者の火、光、白昼、明日と太陽に対する追求と、そのくいとめられない力強い生命力である。<sup>26)</sup>

前述した通り、『女聲』時代の丁景唐はまだ大学生である。彼の詩歌には、閑露が評価しているように、青春の力と希望を感じさせ

るものが多い。「春の日」（『春日雜詩』）、「我が愛」（『我愛』）、「開学」、「向日葵」などはこの類に属する。「汗を土地に染み込ませよう！生命の太陽の前で、胸を張って、歌を歌って、「前に進め！彷徨うな……」足並みをそろえて、春と肩を並べて、前へ進んでいく！」（『春日雜詩』第一卷第八期）、「心の底にある矛盾の戦場で、私は私利に勝ち、金色の太陽の前で、理性の剣を振って、霧のような青い煙を切る、手を振って……」さらば、親愛なる友よ」（『陽光』第二卷第一期）などの詩句からは、理想や光を追い、確固たる信念を持って揺るぎなく前に進む明るい青年の心が見えてくる。また、「向日葵」（第二卷第六期）は、「野生の向日葵は、生まれつきの強情な性格——鋼で鑄造された脊椎。荒野の中、闇を引き受け、風雨の中、強がって戦う」という意思が強く、前向きの向日葵のイメージを生み出している。そしてその向日葵は、「風雨の中、弱音を吐かずには戦う。倒せないのは、その太陽に向ける情熱な心」を持っている。おそらく丁景唐は、その詩を通して、国を解放するために地下で戦い続ける地下黨員たちの決心を表明しようとしているのであろう。

また、自己主張の強い詩歌以外には、日常生活や風景についての詩歌もいくつか書いている。例えば、「南方にて」（『在南方』、第二卷第四期）は草原、夕日、霞、炊煙など、南方の郊外のどかな景色を描いている。「窓」（『窓』第二卷第十二期）には、三月の朝の春霧、春風と教室の風景が描写されている。「友情の草」（『友情草——有贈』

第三卷第十一期)は、丁景唐が友人に対して、自分の創作における沈黙について答えるものである。

最後に、四つ目と五つ目のテーマは「女性」と「子供」である。女性を描く詩としては、「敏子よ、また若い」「敏子、你還正年青」第一卷第九期)と「女だよ、見間違えないで」「別看錯我是個女子」第三卷第九期)が代表的である。前者は「敏子」という女性の友人の口ぶりで、再会の喜びと彼女への励ましの言葉が綴じられている。「女だよ、見間違えないで」で、女性を弄んだり、辱めたりする金持ちの道楽息子を諷刺し、「女性は尊敬されるべきだ」と主張する詩である。子供を素材にした詩は、「星の夢」(第二卷第八期)と「雨の日」(「雨天」第四卷第二期)がある。どちらも子供の純真無垢な心と天真爛漫さを描き、子供の未来への期待を伝える作品である。

### おわりに

以上、『女聲』における丁景唐をはじめとした共産党地下黨員の参入状況と丁景唐の具体的な投稿内容を確認してきた。地下黨員たちの投稿は『女聲』の外部からの投稿の半分ぐらいを占め、『女聲』の誌面に一定の影響を与えたとと言える。しかし、そのような状況になった背後には、青年作家が不足である現状と「できるだけ青年作家を発掘したい」という『女聲』の理念からの影響があったことも無視できない。また、後期の『女聲』の編集は閑露に任せられたこと

ろが多いとは言われているものの、『女聲』の全体の運営を担当し、そして自ら地下黨員に投稿を頼んでいた俊子のことを考えると、やはり閑露の介入だけでなく、俊子自身が地下黨員たちの投稿を『女聲』に取り入れたと把握するのが妥当であろう。

一方、丁景唐の投稿から分かるように、確かに反戦思想と社会主義思想をはのめかしている文章がある。しかしながら、全体からみれば彼は閑露と同じように主に女性解放思想に関係する文章を多く書いた。また、丁景唐の文章を見ると、反日思想と社会主義思想はあまり目立たないことが分かる。日本占領下の「淪陥期文学」では、中国作家たちは検閲を避けるために、よく「言与不言之間」(「語ると語らざるとの間」という表現手法を使っていた。つまり、直接に反戦反日の文章は書けないので、一見して政治と無関係な古典や通俗文学、あるいは暗喩などの表現のなかに言外の意を隠していた。丁景唐と地下黨員たちもその表現手法を使っている。もちろん、地下黨員たちが進歩的な文章をたくさん投稿したことは評価すべきだが、その程度の表現で、『女聲』は「地下黨員たちの自由言論園地」にされたとは言い切れない部分もあるようである。さらに、丁景唐の文章が伝わる思想は俊子の「何ていやかな戦争なんでしょう」と嘆き、「(日本が)支那大陸に現在進出しつゝ、あるものは最も非文化的な面ばかりである」<sup>27)</sup>と批判する思想と共通しているところがあり、女性集団の連帯性を高めようとする『女聲』の主旨からも離れてい

ない。関露を含む地下黨員たちの投稿が『女聲』の主旨、俊子の婦人解放思想と合致していたことは確かである。つまり、関露がわざと丁景唐たちの文章を選んだと言うよりも、俊子が「社会主義を匂わず」部分を大目に見ていたと言うほうが実際に近いのではないか。

俊子は共産党地下活動の協力者だとは言えないが、丁景唐が回想したように、『女聲』という場がなければ、彼は思う存分に詩歌を創作できなかったし、青年の地下黨員たちもあのようになくさん投稿することができなかったのである。日本軍部と国民政府をバックにした雑誌で、そして婦人雑誌であったため、『女聲』での言論はそこまで厳しく制限されていなかったかもしれないが、『女聲』は当時の上海にいる進歩的な青年作者を発掘し、女性読者を繋げる場所としての機能を發揮していた。前述した通り、一九四二年頃の上海文壇の土は「砂漠」と形容できるほどやせていた。『女聲』はその編集者が述べたように、「砂漠の花」だと言えよう。そして、その花を守ったり育てたりしていたのは、俊子であった。

注

- (1) 陳青生『抗戦時期の上海文学』（上海人民出版社、一九九五年）を参照。
- (2) 渡辺澄子「田村俊子の「女声」について」（『文学』第五十六号、一九八八年三月）
- (3) 渡辺澄子「佐藤（田村）俊子と『女聲』」（『昭和文学研究』人文科学）第十七号、十八号、一九八八年七月、一九八九年二月）「田村俊子の「女

声」について」（『文学』第五十六号、一九八八年三月）、塗曉華『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』（中国伝媒大学、二〇一四年）

(4) 劉建輝「日本占領下の上海文壇——田村俊子の足跡を中心に」（『上海一〇〇年日中文化交流の場所』勉誠出版、二〇一三年）

(5) 山崎真紀子「田村（佐藤）俊子、行為体としての『女声』創刊——川から海へ」（『札幌大学総合研究』第六号、二〇一五年三月）

(6) 吳佩珍「上海時代（一九四二—五）の佐藤（田村）俊子と中国女性作家関露——中国語女性雑誌『女聲』をめぐる——」（『比較文学』第四十五号、二〇〇三年）

(7) 山崎真紀子「田村（佐藤）俊子における『女声』——「信箱」「余声」を中心に——（上・下）」（『札幌大学総合研究』第七、八号、二〇一五年十二月、二〇一六年三月）、田村（佐藤）俊子から左俊芝へ、戦時下・上海『女声』における信箱：「私たち」の声のゆくえ」（『アジア遊学』第二〇五号、二〇一七年二月）

(8) 段毅琳「日本占領時期の『女聲』雑誌に見る女性観の研究——普及活動の連携形態と課題」（『常磐台人間文化論叢』第三号、二〇一七年三月）

(9) 頼怡真「中国雑誌『女声』の文芸欄をめぐって——宮沢賢治の「注文の多い料理店」を中心に」（『九大日文』第二十号、二〇一二年十月）、中国雑誌『女声』文芸欄再論——上海で掲載される宮沢賢治テクスト」（『九大日文』第二十四号、二〇一四年十月）

(10) 注4に同じ

(11) 丁景唐「関露同志与『女聲』」（『関露啊関露』人民文学出版社、二〇〇一年）六十五頁

(12) 塗曉華『上海淪陷時期「女聲」雑誌研究』（中国伝媒大学、二〇一四年）五十五頁

(13) 注12に同じ

- (14) 本稿における『女聲』に掲載された文章のタイトルの日本語訳は劉英順の「田村俊子主宰『女聲』の総目次(翻訳)」(『国文目白』第四十三号、二〇〇四年二月)を参照。
- (15) 阿部知二「花影―田舎への手紙―」(『文学界』一九四九年六月)
- (16) 劉曉『党史資料叢刊』第一輯(上海人民出版社、一九七九年)、注12を参照。
- (17) 注11に同じ
- (18) 物価の高騰の影響で、『女聲』の単価は創刊号の一元から第三卷第一期の二十元、さらに第四卷第二期の二十元まで上がってしまう。編集者は「余聲」で数回も紙の価格の高さと出版の難しさについて説明している。
- (19) 注12に同じ、百五十六頁
- (20) 注12に同じ
- (21) 佐藤俊子「国民再組織と婦人の問題」(『婦人公論』一九三九年四月)
- (22) 丁言昭「閔露的編輯生涯」(『閔露啊閔露』人民文学出版社、二〇〇一年)
- (23) 走車幫…いくつかのところが往復し、各地の不足している物資を販売する商売をやること。
- (24) 注12に同じ、百五十九頁
- (25) 夢茵「読了「星底夢」」(『女聲』第四卷第二期、一九四五年七月) 夢茵は閔露の筆名の一つである。
- (26) 注15に同じ
- (27) 佐藤俊子「知識層の婦人に望む 日支婦人の真の親和」(『婦人公論』一九三九年三月)
- (28) 注12に同じ

付記 雑誌『女聲』と中国語文献の引用の日本語訳は全て拙訳による。